2023
1

写真①　《関係項-棲処》を鑑賞する参加者

兵庫県立美術館開館20周年記念「李禹煥」展関連 こどものイベント

「見て　感じて　李禹煥（リ　ウ　ファン）」

■開催日時：2023年1月28日(土)
■参加者　：こども5名、大人３名
■対象　　：小学生～高校生と保護者
■場所　　：レクチャールーム、企画展示室

■概　要
作品を鑑賞した後、感じたことや気づいたことを発表し合い、李禹煥の世界を楽しみました。

■１ オリエンテーションと学芸員によるレクチャー

最初に、展覧会担当の小林学芸員が李さんは韓国出身の方で日本とフランスを拠点に活動する作家だと話しました。
その後「李禹煥ごっこをしよう！」と提案があり、配布した画用紙に1分間で点を１つ、もしくは線を１本描いてみるワークショップをしました。突然のお題に画用紙を見つめている間に時間がきてしまい、1分間延長となりました。周りの様子をうかがったり、線を重ねて描いたりしている人もいました。その後、小林学芸員が李さんもみんなと同じように緊張しながら点や線を描いた作品があるので、どんなことを考えながら描いたのか想像しながら作品を見てほしいとお話ししました。

■２ 鑑賞①
ワークシートを持って、いよいよ展示会場へ 出発！
石や鉄、ガラスを組み合わせた立体作品が床に直接展示されています。さらに進むとガラスが割れている作品と出会い、参加者のみなさんは驚きながらもしゃがんでじっくりと鑑賞していました。
展示室の真ん中にある「光の庭」という吹き抜けになった所（写真①)では、外に出て石が敷いてある作品の上を歩きながら「これは何だろう？」と興味深そうに見ていました。

写真②　《点より》を鑑賞する参加者

写真③　《応答》を鑑賞する参加者の様子

■３ 鑑賞②
展示後半は立体作品とはガラリと雰囲気を変えた絵画作品が並びます。レクチャーで自ら点や線を描く難しさを体験したこともあって、よりじっくりと見ていたようです。どうやって描いたのか筆の跡を追いかけたり、少し離れて指をなぞるように動かしながら筆の動きを確かめたりしていました。《応答》(写真③)のシリーズが並ぶ展示室では塗り重ねられた絵の具の厚みを、作品の横から近づいて角度を変えて見ながら鑑賞する人もいました。

■４ ふりかえり

ワークシートのお題「《関係項-棲処》(写真①)の中に入ってどんなことを感じたかな？」についてと聞くと、「石の積み方が気になった」「床の石がガタガタしていた」など答えてくれました。「石のお城みたい」と発表してくれた人には、小林学芸員が「作品のポイントをついた素敵な表現だね」と感心していました。
「《応答》(写真③)について感じたことは？」の問いには、「色が少しずつ変わっている」「近くで見るとでこぼこしている」など見た目で気づいたことや、「上が指で下にあるボタンを押そうとしている」「上がコップで下がお皿みたい」など描かれた形から想像したことを教えてくれた人もいました。みんなの意見を聞いたあと、李さんの作品について小林学芸員が詳しく解説しました。お気に入りの作品を聞かれ「全部が素晴らしいから選べない」という意見に、「李さんもきっと喜んでくれているよ」と伝えていました。
みんなの発表を聞いて、李さんの作品からさまざまなことを感じ取ってくれたことが分かりました。

◇こどもの感想（※原文をそのまま紹介）
・数年前から李禹煥の作品が気になっていたので、近くで見れてうれしかったです。スマホなどの画面で見るより美術館でゆっくり見るのは大切だなと思いました。(中学2年生)

◇保護者の感想
・こどもたちの色々な感じ方を聞けて良かったです。はじめに1本の線を引く体験は作品をよりおもしろくしたと思います。

□展覧会担当からのコメント
今回のこどものイベントは、小学校低学年から中学生まで、幅広い年齢層の方にお申し込みをいただきました。保護者の方も対象としていることも踏まえて、こどもも大人もそれぞれにふさわしい李禹煥さんの作品へのアプローチができることを期待して、冒頭の1分間のワークショップを設けてみました。これはおおむね好評だったようで、言い出しっぺとしてはほっとしました。今度は立体作品をモチーフとした「李禹煥ごっこ」も考えたいと思います。
（小林公学芸員）